

研究拠点形成事業
平成 27 年度 実施報告書
A. 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	京都大学 霊長類研究所
(ドイツ) 拠点機関：	マックスプランク進化人類学研究所
(イギリス) 拠点機関：	セントアンドリュース大学
(アメリカ) 拠点機関：	カリフォルニア工科大学

2. 研究交流課題名

(和文)： 心の起源を探る比較認知科学研究の国際連携拠点形成
(交流分野： 比較認知科学)

(英文)： Comparative Cognitive Science Network for understanding the origins of human mind
(交流分野： Comparative cognitive science)

研究交流課題に係るホームページ：

[http:// www.pri.kyoto-u.ac.jp/sections/ccsn/index.html](http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/sections/ccsn/index.html)

3. 採用期間

平成 26 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日
(2 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：京都大学 霊長類研究所

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：京都大学霊長類研究所・所長・平井啓久

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：京都大学霊長類研究所・教授・松沢哲郎

協力機関：京都大学、神戸大学、東京大学

事務組織：京都大学

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：ドイツ

拠点機関：(英文) Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology

(和文) マックスプランク進化人類学研究所

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Department of Evolutionary Genetics,
Director, Svante PÄÄBO

協力機関：(英文)

(和文)

経費負担区分 (A 型)：パターン 2

(2) 国名：イギリス

拠点機関：(英文) University of St. Andrews

(和文) セントアンドリュース大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) School of Psychology & Neuroscience,
Professor, Andrew WHITEN

協力機関：(英文) University of Oxford, University of Kent, Cambridge University,
Edinburgh University

(和文) オックスフォード大学、ケント大学、ケンブリッジ大学、エジンバラ
大学

経費負担区分 (A 型)：パターン 2

(3) 国名：アメリカ

拠点機関：(英文) California Institute of Technology

(和文) カリフォルニア工科大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Division of the Humanities and Social
Sciences, Professor / Ralph ADOLPHS

協力機関：(英文) Harvard University, Duke University, Washington University in St.
Louis, Lincoln Park Zoo, University of Georgia

(和文) ハーバード大学、デューク大学、ワシントン大学セントルイス校、リ
ンカーンパーク動物園、ジョージア大学

経費負担区分 (A 型)：パターン 2

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

人間を特徴づける認知機能とその発達のな変化の特性を知るうえで、「それらがどのように進化してきたか」という理解が必要不可欠である。本研究交流計画は、①人間にとって最も近縁なパン属 2 種 (チンパンジーとボノボ) を研究対象に、②野外研究と実験研究を組み合わせ、③日独米英の先進 4 か国の国際連携拠点を構築することで、人間の認知機能の特徴を明らかにすることを目的とする。平成 22-24 年度採択の最先端研究基盤支援事業によって、京大の霊長類研究所と熊本サクチュアリに、比較認知科学実験施設が整備された。その整備によって日本には皆無のボノボ (チンパンジーの同属別種) の 1 群を平成 25 年 10 月に北米から導入できることになった。そこで世界に類例のない新たな試みとして、チンパンジーとボノボの双方を対象にした比較認知科学研究を国際的な連携のもとに推進したい。申請者らは、「進化の隣人」と呼べるチンパンジーを対象にした研究をおこなって

きた。その過程で、チンパンジーには瞬間視記憶があることを発見した。一方、人間の言語につながる象徴の成立が彼らには困難なことを実証した。「想像するちから」と呼べる認知的基盤が、人間の本性だといえる。本研究交流計画では、日独米英の先進4か国による国際共同研究を醸成し、ヒト科3種の比較研究を通じて、「人間とは何か」という究極的な問いへの答えを探することを目的とする。

5-2. 平成27年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

初年度におこなった人的交流をもとに、各国の拠点機関および協力機関とのあいだに、より組織的な研究協力体制を構築する。

<学術的観点>

ヒトとパン属2種だけでなく、同じヒト科に属するが東南アジアに生息するオランウータンや、さらにその外群の旧世界ザルも対象に広範な視点から比較認知科学研究を推進する。

<若手研究者育成>

国内外の若手研究者の交流を積極的におこなう。海外の若手研究者を招へいするとともに、国内の若手研究者の海外派遣もおこない、若手の人的交流を進める。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

アフリカやアジアにおける霊長類を対象とした野外研究について、先進4か国を中心に相互の連携を深めて共同研究を実施する体制を構築する。

6. 平成27年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

6-1 研究協力体制の構築状況

野生のヒト科大型類人猿を対象とした野外研究では、国際的な相互乗り入れによる共同研究を開始した。西アフリカ・ギニアで研究をおこなってきた日本側研究者が、イギリス側研究者の運営する東アフリカ・ウガンダの野生チンパンジー調査地を訪問した。東アフリカを調査拠点とするイギリス側研究者の西アフリカ調査地への訪問は過去にも何度かおこなわれているが、逆方向の訪問は本交流事業によって初めて達成された。西アフリカでの調査もエボラ出血熱の収束を受けて再開しており、国際連携による研究を進めることが可能な状況となってきた。これらにより、相手国が運営してきたアフリカの長期調査地を含む、複数の地域における野生大型類人猿の行動の直接比較が可能となった。飼育下のヒト科大型類人猿を対象とした実験研究では、本交流を通じて渡航をおこなった日本側研究者やアメリカ側研究者が、日本の保有するチンパンジーやボノボなどの研究資源や、自動実験装置を使った先端的な研究手法を活用することで、国際的に見ても価値のある研究成果を生み出してきている。本交流によって開始した人的交流を、他経費も用いて発展させることで、より組織的・体系的な形で相手国との交流を開始することができた。

6-2 学術面の成果

ヒトとパン属 2 種（チンパンジー・ボノボ）の比較だけでなく、同じアフリカ大型類人猿であるゴリラや、東南アジアに生息するオランウータンを対象とした比較認知科学研究を推進した。とくに熊本サンクチュアリでは、チンパンジーとボノボの集団を対象にした直接比較研究が本格的におこなわれるようになり、着実にデータが蓄積されてきている。これらのデータの分析から、ボノボのほうが他者の視線への感受性が高く、より濃密な社会交渉をおこなっている可能性等が明らかになってきている。ヒト科大型類人猿は、とくに飼育下で類似した認知発達レベルを示すと考えられるが、野生での生活様式や発揮される知性の詳細については種ごとに異なるパターンを示すようだ。今後の比較認知科学研究により、より詳細な種間比較をすることが重要になるだろう。さらに、その他の霊長類や哺乳類に比較対象を広げる方向に研究を進めることで、より広範な視点からヒトの進化に迫ることができた。

6-3 若手研究者育成

若手研究者の交流を積極的におこなった。海外から、多数の若手研究者を招へいすることで、国内の若手研究者との交流機会を多く設けることができた。若手研究者（ドイツ側（フランス）5名 358日、ドイツ側（ポルトガル）1名 90日、ドイツ側（オランダ）1名 30日、イギリス1名 43日）が比較的長期間滞在し、共同研究を実施するとともに国内の若手研究者と交流した。セミナーなどの機会を利用しての若手研究者の短期来日は、ドイツ側（ポルトガル）1名、イギリスから2名、アメリカから2名、日本側（タイ）1名だった。また、日本側参加研究者にも外国籍の者が多数いるため、日常的に国際的な研究環境となっている。そのため、日本人の若手研究者にとっては、国際的な場でも十分通用するようなコミュニケーション能力を身に着けることが容易な状況である。若手研究者ではあっても、英語に堪能な者が多く、彼らを通じた本交流によって積極的に海外派遣をおこなって、研鑽をつませることができた。京都大学から学生のべ2名、ポスドク・研究員2名、若手教員のべ6名を本経費で派遣した。国内外の若手研究者を中核として、さらに研究協力体制を強化する方向に進んでおり、本交流における若手研究者の参加意義は非常に大きくなっている。

6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

とくにアフリカにおいては、日本の研究者が主導することでアフリカ霊長類学コンソーシアムが発足し、平成27年から活動を開始した。第1回の会議では、アフリカ各国から多数の研究者が参加し、各国の担当者を決めて今後の積極的な連携体制を構築する足掛かりを作ることができた。本交流の先進4か国を中心にしつつ、アフリカ諸国の自発的な活動が芽生えつつあり、今後もこの動きを支援することが、野生大型類人猿の保全にもつながると期待される。アジアでも、マレーシア科学大学を中心に国際的研究ネットワークを作ろうとする動きがはじまったため、この活動への技術的研究支援もおこなう予定である。本

交流の参加国を中核として、全世界に霊長類学のネットワークを広げる端緒が徐々に形成されてきたといえる。

6-5 今後の課題・問題点

西アフリカにおけるエボラ出血熱は収束したものの、いくつかの地域では現地情勢により調査に支障が出ているところもある。また国内でも、チンパンジーとボノボがくらす熊本サンクチュアリ周辺では地震が頻発している。幸い施設への影響は軽微であったものの、従前の研究体制への少しでも早い復旧が望まれる。

6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- (1) 平成27年度に学術雑誌等に発表した論文・著書 2 本
うち、相手国参加研究者との共著 1 本
 - (2) 平成27年度の国際会議における発表 8 件
うち、相手国参加研究者との共同発表 0 件
 - (3) 平成27年度の国内学会・シンポジウム等における発表 2 件
うち、相手国参加研究者との共同発表 1 件
- (※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)
(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

7. 平成27年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 30 年度
研究課題名	(和文) 野生のヒト科大型類人猿を対象とした野外研究 (英文) Field study on wild great apes				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 松沢哲郎・京都大学霊長類研究所・教授 (英文) Tetsuro MATSUZAWA, Primate Research Institute of Kyoto University, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) UK: Richard BYRNE, University of St. Andrews, Professor USA: Crickette SANZ, Washington University in St. Louis, Associate Professor				
参加者数	日本側参加者数		15 名		

	(ドイツ) 側参加者数	5 名
	(イギリス) 側参加者数	4 名
	(アメリカ) 側参加者数	3 名
27年度の研究 交流活動	<p>日本がもつ野生チンパンジーの長期調査地である西アフリカ・ギニア共和国・ボツソウにおける調査は、エボラ出血熱の流行によって研究者の渡航を一時中止していたが、平成27年12月末にギニアでも収束宣言が出されたため、調査活動を再開した。平成27年初頭に発足したアフリカ霊長類学コンソーシアムの第1回国際会議が12月にウガンダで開催された機会を利用し、日本がもつ他の調査地である東アフリカのカリンズと、英国のもつ東アフリカのブドンゴで共同研究を開始するため、平成27年12月に京都大学の若手研究者による短期調査地訪問と相互交流をおこなった。また、コンゴ民主共和国にクラス野生ボノボの新たな調査地マレボで、本格的な調査開始にむけた準備をおこなっている。アジアにクラス大型類人猿のオランウータンについては、平成27年4月末から5月に京都大学から3名がインドネシアの調査地訪問をおこなうとともに、マレー半島でおこなわれているオランウータンの野生復帰プロジェクトやサバ州での野生オランウータン調査のため、日本側研究者のべ6名がマレーシアに渡航した。ポルトガルの野生馬にかんする調査も開始した。</p>	
27年度の研究 交流活動から得 られた成果	<p>西アフリカのエボラ出血熱の流行が収束し、野生チンパンジーの調査再開と、中断していた間に現地調査助手がトラップカメラなどで蓄積したデータを入手できた。調査地間の乗り入れもおこない、西アフリカの野生チンパンジー研究者が東アフリカの長期調査地を訪問することで、亜種の違い、地域による行動・生態の差異などを検証した。野生ボノボの調査でも、よりアクセスの容易な新しい調査地での研究を本格化させることで、チンパンジーとの種間比較、同種内の地域差などを研究することが可能になった。また、東アフリカのウガンダには野生ゴリラも生息しており、若手研究者が予備的調査を開始した。アジアにクラス野生オランウータンについては、ボルネオ・サバ州沿岸部に危険情報が出ており同州の野外調査地には入れないが、その他の地域で活動をおこなった。野生馬も含めて、多様な種を対象に比較研究を推進した。</p>	

7-2 共同研究

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 30 年度
研究課題名	(和文) 飼育下のヒト科大型類人猿を対象とした実験研究				
	(英文) Experimental research on captive great apes				

日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 松沢哲郎・京都大学霊長類研究所・教授	
	(英文) Tetsuro MATSUZAWA, Primate Research Institute of Kyoto University, Professor	
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Germany: Josep CALL, Max Planck Institute of Evolutionary Anthropology, Professor UK: Andrew WHITEN, University of St. Andrews, Professor	
参加者数	日本側参加者数	28 名
	(ドイツ) 側参加者数	15 名
	(イギリス) 側参加者数	1 名
	(アメリカ) 側参加者数	3 名
27年度の研究 交流活動	京都大学で保有する飼育下のチンパンジーおよびボノボを主な対象とした比較認知科学研究を国際的連携にもとづいて推進した。霊長類研究所の飼育・研究施設の拡大が10月に完了し、その前後での行動比較を国際共同研究として実施した。また平成25-26年に日本に導入されたボノボを対象に、チンパンジーとの直接比較研究を本格的に開始した。また、霊長類研究所で長年の使用実績がある自動実験装置等をアメリカのシカゴ・リンカーンパーク動物園等の海外施設に導入し、大型類人猿を対象とした実験研究がおこなわれている。また、これらの自動実験装置を、霊長類の外群としての哺乳類であるウマの実験的研究にも導入し、国際連携による共同研究として実施した。コーディネーターの松沢が相手国などに渡航する際に、各国参加研究者と研究打ち合わせをおこなった。	
27年度の研究 交流活動から得 られた成果	飼育下におけるパン属2種(チンパンジーとボノボ)を対象にした実験研究により、両種の直接比較研究が可能となり、両種の社会交渉の微細分析などから興味深い種差が明らかになりつつある。パン属2種の外群としての大型類人猿やその他の霊長類、さらにその外群としての哺乳類を対象とした比較研究もおこなっている。チンパンジーと同様の自動実験装置と課題設定を使っても、オランウータンでは反応のパターンが少し異なる可能性がある。また、ウマでも同様の実験的研究をおこなうことで、ヒトにつながる認知機能の進化をより広範な視点から論じることが可能になった。ウマを対象とした、チンパンジーと同様のタッチパネルを用いた比較認知研究の成果は、すでに公表もされており、本交流活動による研究成果のよい先例となった。また、平成27年度末より米国コーディネーターが日本に滞在し、研究交流をおこなっている。	

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「アフリカにおける野生チンパンジー研究」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Research of wild chimpanzees in Africa”
開催期間	平成 27年 7月 18日 ~ 平成 27年 7月 22日(5日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 京都(京都大学)
	(英文) Kyoto (Kyoto University)
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 松沢哲郎・京都大学霊長類研究所・教授
	(英文) Tetsuro Matsuzawa, Primate Research Institute of Kyoto University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文)

参加者数

日本 〈人/人日〉	A.	25/ 95
	B.	275
ドイツ 〈人/人日〉	A.	2/ 12
	B.	
イギリス 〈人/人日〉	A.	3/ 92
	B.	
アメリカ 〈人/人日〉	A.	1/ 7
	B.	
合計 〈人/人日〉	A.	31/ 206
	B.	275

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	<p>アフリカ各地でおこなわれている野生チンパンジーを主な対象とした研究について情報交換をおこない、国際共同研究の実施にむけた議論をおこなうことを目的とする。第31回日本霊長類学会とそれに引き続いておこなわれるPWS国際シンポジウムの機会を利用して開催するため、霊長類学に関わる多数の研究者を交えた議論をおこなうことができる。</p>		
セミナーの成果	<p>アフリカ霊長類学コンソーシアムの設立により、アフリカ各国の連携が強化される見込みである。それに先立つ形で、先進諸国を中心におこなわれてきた現在までの研究成果等について情報共有をおこなった。相手国の参加研究者が、アフリカ各地でおこなっている野生チンパンジーの研究について、調査地の概略や歴史、実際の研究成果などにかんする写真や動画を交えた発表があった。文献だけでは得られない情報も多く含まれており、今後の国際連携による野外研究の進め方について具体的に検討する非常によい機会となった。実際、このセミナーの前後でおこなった若手研究者同士の交流がきっかけとなって、東アフリカ・ウガンダ・ブドongoの英国がもつ調査地を日本側研究者が訪問し、野生チンパンジーの調査をおこなうことにつながった。さらに、英国の研究者が東アフリカでおこなってきたジェスチャー研究の視点を、日本が西アフリカで収集してきた長期ビデオデータの分析に応用することで、社会的コミュニケーションの亜種間・地域間比較にかんする共同研究の実施が現実的になった。</p>		
セミナーの運営組織	<p>運営代表者：松沢哲郎（京都大学霊長類研究所） 運営委員：平田聡（京都大学野生動物研究センター） 運営委員：林美里（京都大学霊長類研究所）</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	<p>内容 国内旅費</p> <p>外国旅費（日本側参加研究者）</p> <p>外国旅費等消費税</p> <p>合計</p>	<p>金額 1,702,267 円</p> <p>72,200 円</p> <p>5,776 円</p> <p>1,780,243 円</p>
	(ドイツ・イギリス・アメリカ)側	内容 国際航空運賃	
	()側	内容	

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「ヒトの認知の進化的基盤」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Evolutionary origins of human cognition”
開催期間	平成 27年 9月 24日 ~ 平成 27年 9月 26日(3日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) イタリア・ローマ(ローマトレ大学)
	(英文) Rome, Italy (Roma Tre University)
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 松沢哲郎・京都大学霊長類研究所・教授
	(英文) Tetsuro Matsuzawa, Primate Research Institute of Kyoto University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) Elisabetta VISALBERGHI, Institute of Cognitive Sciences and Technologies, Research Director

参加者数

日本 〈人／人日〉	A.	5/ 22
	B.	1
ドイツ 〈人／人日〉	A.	2/ 6
	B.	1
イギリス 〈人／人日〉	A.	
	B.	2
アメリカ 〈人／人日〉	A.	
	B.	2
合計 〈人／人日〉	A.	7/ 28
	B.	6

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>ローマでおこなわれる Protolang 4 の招待セッションとして、比較認知科学研究の最新の成果について、若手研究者 3 名による国際セミナーを実施する。日本側参加研究者であるヴィザルベルギ氏が、オマキザルを対象とした前言語的知性の研究について招待講演をおこない、それと相補的なセミナーとなる。比較認知科学を表題とした国際セミナーを海外で実施して、成果を発信することを目的とした。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>日本でおこなわれている比較認知科学研究の成果を国際的に発信することができた。Protolang は言語以前の知性をテーマにする国際会議で、霊長類を対象とした比較認知科学研究と密接に関連する分野である。会議の中では、人間や言語の進化にかんする幅広い視点からの発表と、異分野の研究者による積極的な討論がおこなわれた。会議初日に、日本側参加研究者であるヴィザルベルギ氏が、招待講演をおこない、オマキザルの石器使用に関する比較認知科学研究の成果を発表した。本セミナーは、翌日の招待セッションとしてシンポジウム形式でおこなった。日本人若手研究者 3 名が、それぞれの視点から研究発表をおこなった。ヒト以外の現生霊長類を対象とした比較認知科学研究は、この学会の間では斬新な分野であったため、とくに言語進化と関連の深い発表にかんして、セッション終了後も盛んに討論がおこなわれた。2 名の発表者は、ローマ滞在后、他の研究者を訪ねての研究打ち合わせという別用務があったため、本交流経費からの支出は 1 名のみだった。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>運営責任者：松沢哲郎（京都大学霊長類研究所） 参加発表：足立幾磨（京都大学霊長類研究所） 参加発表：林美里（京都大学霊長類研究所） 参加発表：山本真也（神戸大学）</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 国内旅費 外国旅費（日本側参加研究者） 外国旅費等消費税</p>	<p>金額 5,250 円 147,160 円 11,773 円 合計 164,183 円</p>
<p>(ドイツ・イギリス・アメリカ) 側</p>	<p>内容 国際航空運賃、滞在費</p>		
<p>() 側</p>	<p>内容</p>		

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣期間	用務・目的等
タフツ大学・准 教授・Aniruddh D PATEL	日本・東京・ 日本女子大	2015年9月	第75回日本動物心理学会大会にて発表

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当なし

8. 平成27年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	日本	ドイツ	イギリス	アメリカ	マレーシア(第三国)	インドネシア(第三国)	ポルトガル(ドイツ側 参加研究者)	イタリア(日本側参加 研究者)	ウガンダ(イギリス側 参加研究者)	オランダ(ドイツ側参 加研究者)	合計	
日本	1	()	1/8 ()	()	4/48 ()	3/34 ()	2/22 ()	()	()	()	10/112 (0/0)	
	2	()	()	(1/22)	()	()	()	2/14 (3/8)	()	()	2/14 (4/38)	
	3	()	()	()	1/17 ()	()	()	2/16 ()	1/13 ()	()	4/46 (0/0)	
	4	()	()	()	()	3/18 ()	()	()	()	1/4 ()	4/22 (0/0)	
	計	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/8 (0/0)	1/17 (1/22)	7/66 (0/0)	3/34 (0/0)	4/38 (0/0)	2/14 (3/8)	1/13 (0/0)	1/4 (0/0)	20/194 (4/30)
ドイツ	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	2	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (2/6)	
	3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	計	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (2/6)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (2/6)
イギリス	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	2	4/102 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	4/102 (0/0)	
	3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	計	4/102 (0/0)	0/0 (0/0)	()	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	4/102 (0/0)
アメリカ	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	2	3/27 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	3/27 (0/0)	
	3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	4	1/15 (1/7)	()	()	()	()	()	()	()	()	1/15 (1/7)	
	計	4/42 (1/7)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	()	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	4/42 (1/7)
フランス (ドイツ側 参加研究者)	1	6/373 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	6/373 (0/0)	
	2	(1/5)	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (1/5)	
	3	1/43 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	1/43 (0/0)	
	4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	計	7/416 (1/5)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	7/416 (1/5)
スイス(ド イツ側参 加研究者)	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	2	1/7 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	1/7 (0/0)	
	3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	計	1/7 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/7 (0/0)
ポルトガ ル(ドイツ 側参加研 究者)	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	2	1/90 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	1/90 (0/0)	
	3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	計	2/101 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/101 (0/0)
オランダ (ドイツ側 参加研究 者)	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	2	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	3	1/30 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	1/30 (0/0)	
	4	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	計	1/30 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/30 (0/0)
タイ(日 本側参加 研究者)	1	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	2	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	3	()	()	()	()	()	()	()	()	()	0/0 (0/0)	
	4	1/13 ()	()	()	()	()	()	()	()	()	1/13 (0/0)	
	計	1/13 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/13 (0/0)
合計	1	6/373 (0/0)	0/0 (0/0)	1/8 (0/0)	0/0 (0/0)	4/48 (0/0)	3/34 (0/0)	2/22 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	18/485 (0/0)
	2	9/226 (1/5)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (1/22)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/14 (5/14)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	11/240 (7/41)
	3	2/73 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/17 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/16 (0/0)	0/0 (0/0)	1/13 (0/0)	0/0 (0/0)	6/119 (0/0)
	4	3/39 (1/7)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	3/18 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/4 (0/0)	7/61 (1/7)
	計	20/711 (2/12)	0/0 (0/0)	1/8 (0/0)	1/17 (1/22)	7/66 (0/0)	3/34 (0/0)	4/38 (0/0)	2/14 (8/14)	1/13 (0/0)	1/4 (0/0)	40/808 (8/48)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
0/0 ()	0/0 ()	0/0 ()	11/26 ()	11/26 (0/0)

9. 平成27年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	6,842,569	
	外国旅費	6,547,958	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	585,637	
	その他の経費	0	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	523,836	
	計	14,500,000	
業務委託手数料		1,450,000	
合 計		15,950,000	

10. 平成27年度相手国マッチングファンド使用額

相手国名	平成27年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
ドイツ	9000 [EUR]	1,125,000 円相当
イギリス	4000 [GBP]	642,000 円相当
アメリカ	6000 [USD]	667,000 円相当

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。